第二十九回
国富町青少年健全育成町民大会
作文集

「青少年健全育成作文コンクール」最優秀賞

小学生の部　加治佐奈々　さん（本庄小学校六年）　「人の失敗を笑わない」

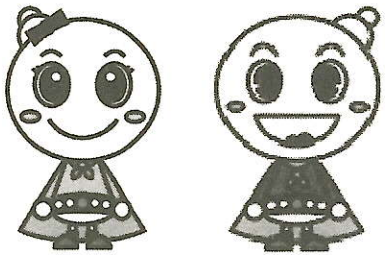
中学生の部　石井　媛夏　さん（木脇中学校二年）　「認め合える社会に」

高校生の部　福島　亜耶　さん（本庄高等学校一年）「祖母が教えてくれたこと」

「青少年の主張」（青少年育成県民会議主催）

優秀賞　茂田　庵　さん（八代中学校三年）　「今の自然を守るために」

優良賞　寺脇　倖穂　さん（本庄中学校三年）　「魔法道具スマホと人間」



認め合える社会に

木脇中学校　二年　石井　媛夏

私は、極型ファロー四徴症という指定難病を患っています。この難病と呼ばれるファロー四徴症は、心臓の発生の段階で、肺動脈と大動脈の二つの大きな血管を分ける仕切りの壁が体の前方にずれたために起こる心臓の先天性心疾患です。生まれた時から、今までずっと二ヶ月に一回病院に通い、年に数回は、県外の病院で検査をしてもらっています。運動制限もありますが、私自身は体を動かすことが大好きです。以前、学校で持久走の練習がありました。走りたくてたまらなかったのですが、病気のこともあり体育の授業を見学していました。その時友達から、

「走らなくていいっていいな。」

と言われました。その言葉を聞いて、私はとても悔しく悲しい気持ちになりました。と同時に、

「なんでそんなこと言うの・・・。」

と怒りに似た複雑な感情をもちました。みんな私の病気のことは知っているはずなのに理解してくれていないのかなとつらく感じました。私のことを理解しようと努力してから発言してほしいと強く思いました。

一年生の時、総合的な学習の時間でアイマスクと車いす体験をしました。アイマスク体験では、アイマスクをした状態で補助してくれる友達といっしょに歩いたり、階段を上り下りしたりしました。私は、アイマスク体験をしてみて、目が見えないということは、とても大変でこわいものだと知ることができました。車いす体験では、実際に車いすに乗って自分で動かしてみたり、友達に車いすを押してもらい段差を上ってみたりしました。自分の足で歩けないことは、とても不便で不自由だと実感しました。また、人に押してもらって、段差を上がることは、思っていた以上にこわくて、車いすを押してもらうことにも相手を信用して体を任せることが必要なのだと感じました。

私は、自分が経験して傷ついた出来事とこの体験を通して、見た目では分からない病気をもつ私の気持ちや、障がいをもつ方々の困っていることに気付き、理解することはとても難しいことだと思いました。

日本では、認め合う社会になるためにさまざまな取組があります。一つ目は、ヘルプマークです。これは聞いたことのある人も多いと思います。ヘルプマークとは、障がいや疾患などがあることが外見からは分からない人が支援を受けやすくなるようにと作成されたマークです。このマーク以外にも妊娠していることが分かるマークや福祉車両にも誰もが分かりやすいマークがつけられています。二つ目は、障害者手帳です。障害者手帳とは、障がいを証明するための手帳です。これを持つことで、さまざまな料金の割引や助成、障害者雇用制度を利用できるなどたくさんのメリットがあります。

しかし、このような取組があっても人の心が変わらないと認め合う社会の実現はできません。まちがった「理解」が「怒り」に変わってしまわないような社会になってほしいです。これからの社会が一人一人に優しく生きやすい、みんながみんなを認められるようなものになってほしいです。